

linearibus apice obtusis pilosis; petala sepalis aequilonga, in tubum apice trilobulis connata; stamina 6, antheris oblongis atratis. Flores ♀; sejala 3, libera, lineari-navicularia, 1.5 mm longa, olivaceo-atrata, apice acuta et pilosa; petala 3, libera, albida, oblanceolato-lineararia, sepalis paulo breviora, pilosa, apice nigro-glandulosa. Semina oblonga, 0.5 mm longa, minutissime ciliolata.

Hab. Nepal: Arum Valley, Hatiar, N. of Num, alt. 6000 ft., J. D. A. Stainton, Aug. 20, 1956, n. 1386—Type in Herb. British Museum; Argam, near Pokhara, alt. 2500 ft., J. D. A. Stainton, W. R. Sykes & L. H. J. Williams, Sept. 11, 1954, n. 7172, n. 7173.

This species resembles *Eriocaulon viride* Koernicke, but is distinguishable from it in having much slender and longer peduncles, broader involucre bracts, and male calyces with linear lobules.

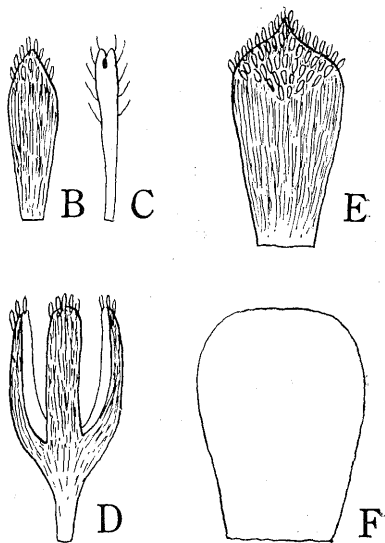


Fig. 2. *Eriocaulon staintonii*. B. A female sepal. C. A female petal. D. A male calyx. E. A floral bract. F. An involucre bract. B-F $\times 15$.

○*Racomitrium canescens* var. *yezo-alpinum* Sak. について (水島うらら) Urara MIZUSHIMA: On *Racomitrium canescens* var. *yezo-alpinum* Sak. *Racomitrium canescens* var. *yezo-alpinum* Sak. は桜井久一博士が辻部正信氏採集の北海道石狩大雪山産の二点の標本 (MAK B9217, B9229) に基いて書かれたものである。桜井博士はこの時、同変種は外観からはまるで基本種とは別種のように思えるが、顕微鏡で観る細部は種として区別する程異ったものではないとして変種の記載をされたのである。桜井博士が外観上 *R. canescens* var. *canescens* とこの変種が異なると思われた点は氏のノートにあるように植物体が直立して茶色を帯びることにあるようである。var. *canescens* では主茎下部は匍い、上部は立上るが、植物体全体が直立することは稀である。又植物体の色は乾燥標本でも上部は黄緑色～汚黄緑色のことが多く、時には植物体の下部同様黒緑色のこともあるが茶を帯びることはほとんどな

い。東京都立大学牧野標本館にある *var. yezo-alpinum* の *syntype* 標本を観るといづれも桜井博士の記文にあるように密な蘚座をなし、少数の枝を二叉分枝で出し乍ら直立して、高さ約 3~4 cm に達している。乾燥状態の標本で植物体は茶を帯びた色をしている。葉形は卵形の基部から披針状に伸び、葉身上部は *var. canescens* よりやや長く、葉縁の外への捲き返りが幾分ゆるやかである他は外観上は *var. canescens* によく似ている。しかし細かく観察すると葉基の細胞は膜がより規則的に波打ち、*var. canescens* に見られるような大きくて高いパピラがない。葉先の透明尖について桜井博士は“*rarius hyalina*”と言っておられ、確かに葉先は鈍またはやや鋭頭で透明尖は稀である。しかし沢山の葉を調べてみると僅かに透明尖を持つものがあって、それらの葉では透明細胞は葉先のみでなく、葉先から葉縁に沿って下方へ伸びている。この透明な細胞上には僅かながらパピラがあり、また外縁はやや欠刻状になるものもあり、細胞は扁平で *var. canescens* のもののように管状になる形跡はない。これらの性質を合せ考えると *var. yezo-alpinum* は *R. canescens* より *R. lanuginosum* の透明尖の発達の悪い型と考えた方が良さそうである。ちなみに *R. lanuginosum* は主茎は直立して枝を分ち、植物体の色は、黒緑、類黒、茶、灰緑色と変化に富み、その透明尖はふつう顕著で葉先から長く突き出すが、*R. canescens* の場合と異り、管状にならず、又葉の縁に沿って長く下方にまで及ぶのが特徴である。*R. lanuginosum* は周知のように広分布種で且つ変化に富む植物で、桜井博士の変種もこの種の下で書かれた多くの変種、品種のどれかに該当するであろう。しかし筆者はこのような変種や品種を区別する必要はないと思うので次のように扱い度い。

***Racomitrium lanuginosum* (Hedw.) Brid., Mant. Musc. 79 (1819)—*R. canescens* (Hedw.) Brid. *var. yezo-alpinum* Sakurai in Bot. Mag. Tokyo 51: 141 (1937); Musci Japonici 64 (1954)—syn. nov.**

又 *R. canescens var. yezo-alpinum* の原記載文には二点の標本が *type* の指定なしに引用されているが、その中の一点、no. 9217 の標本は包紙上に桜井博士の筆跡で (*type*) と記されており、記載文ともよく一致するので、この標本 MAK B9217 を *lectotype* に指定したい。
(東京都府中市 [REDACTED])

○小笠原諸島のシダ拾遺 (1) (大場秀章) Hideaki OHBA: Additional notes on Pteridophytes of the Bonin and Volcano Islands (1).

小笠原諸島のシダ植物について一応のまとめを行った (東北大学理科報告 生物学 36: 75-127 (1971))。その後新たに見い出された種類や近縁種との比較研究の結果を逐次記してゆきたいと思う。

(1) *Woodwardia orientalis* Sw. *var. formosana* Rosenst. ハチジョウウカグマ
1970年5月山崎 敬・榎本克彦両氏によって北硫黄島の海拔 200 m の地点で採集さ